

江畔独歩花を尋め

杜

甫

黄四娘の家花蹊に満ち

千朵万乃木枝を圧して低

留連せる戯蝶時時に舞

自在の嬌鶯は恰恰として啼く

【作者】杜甫（七一〜七七〇）盛唐の詩人。李白とともに唐代最高の詩人。字は子美・少陵と号した。襄陽（河南省）の人。先祖に

晋の学者杜預があり、祖父は初唐の詩人杜審言（としんげん）。三十五歳頃まで呉・越・齊・趙の間を遊歴、この間に李白・高適と交わり詩を賦したりしている。また進士の試験を受けたが及第せず、長安で困窮の生活を送った。長安に出て仕官を望んだがごく低い身分にとどまり、安祿山の乱に際しての忠誠を賞せられて左拾遺を授けられた。しかし翌年華州に左遷され、そこで飢饉にあつて官を捨て蜀の成都へ落ちのびた。成都では節度使嚴武から檢校工部員外郎の官を与えられ、浣花溪のほとりに草堂を構え、やや落ち着いた生活をおくったが、帰郷を志して成都を離れ、揚子江を下つて舟旅を続ける途中、長沙付近で舟中に没した。唐代のみならず、中国最大の詩人として李白と並んで「李杜」と称され、詩聖と呼ばれ、また、その詩はそのまますぐれた歴史史であるとして「詩史」といわれる。代表作『北征』『三吏三別』『兵車行』など。

【語釈】*江畔…浣花溪のほとり *黄四娘…草堂の近くの村のお婆さんの名。「娘」はむすめの意ではなく、年配の女性の

称呼に用いる。 *蹊…こみち *朶…花のついた小枝 *留連…そこに続けている *恰恰…鳥の啼き声

【通釈】黄四娘の家では、花がこみちに咲きみちている。枝が枝を押しつ重なつてたれていく。いつまでも去らずに花に戯れている蝶は、ときどき舞い上がり、「自由自在に啼く愛らしい鶯は、コウコウと啼きたてている。」